

第3回未来型図書館を考える講演会について



01 日時・参加者・次第

【日 時】令和4年9月25日(日)13時30分～15時30分

【参加者】60名

【次 第】市長挨拶 ▶ 講演 ▶ 質疑応答

02 講師：吉成 信夫 氏 プロフィール

東京都出身。CIコンサルティング会社役員等を経て岩手県東山町へ家族で移住。同町で「石と賢治のミュージアム」を立ち上げた後、葛巻町の廃校を活用したエコスクール「森と風のがっこう」を手がける。県立児童館「いわて子どもの森」初代館長として7年間、行政の枠に収まりきらない異色の運営で知られた。2015年より岐阜市立図書館長を経て、2020年より現職。著書に「ハコモノは変えられる！子どものための公共施設改革」(学文社)がある。毎日新聞地球未来賞クボタ賞受賞。ムーミンと旅と喫茶店をこよなく愛する。

03 講演内容の概要

演題「子どもの声は未来の声～図書館は屋根の付いた公園である～」

「みんなの森ぎふメディアコスモス」は、岐阜大学医学部跡地を活用し、施設の中核を担う市立中央図書館や、市民活動交流センター、ホール等からなる複合文化施設として、2015年7月に開館。吉成氏は、全国公募によって同年から図書館長に就任され、2020年から総合プロデューサーとして活躍されている。

吉成氏は当初から、「子ども声は未来の声」という理念を掲げ、子どもたちの豊かな未来へとつながる道を応援したいという想いのもと、様々な取組みに挑戦されている。中でも、本と人とを結びリーダーである「子ども司書の養成」や、図書館に來ない・來ることができない子どもたちのために本を読む楽しさを届ける「わんこカート」の導入、中高生を中心とした世代の悩みに対して司書がウィットに富んだ文面で回答する公開文通「YA交流掲示版」など、大人になるまで主体的に図書館に通い続けられる取組みについてお話しいただいた。

また、「未来を描くために過去を知ろう」という思いのもと、岐阜の郷土文化について学ぶ講座「みんなの図書館おとなの夜学」を開催するなど、岐阜に住んでいる、関わっている大人を対象とした活動も紹介いただいた。

そして、施設名称にもなっている「みんな」の意味について、図書館は単に本を貸す・返すという場所ではなく、図書館に訪れる人との関わりの数や広がり・深さが大切であり、それが一番大きな社会的資産であることを司書たちと確認しあったエピソードや、図書館をまちの中に拓いていくこと、図書館を広場のようにしていこうという思いで取り組まれてきたことについてもお話しいただいた。

最後には、「本が人とまちをつないでいく」という観点から、まちを巡る情報ツールである「みんなのたからものMAP」の作成や、商店街のメンバーとの「ぎふまちライブラリー」の実践など、図書館には、新たな対流を起こし続けることができる無限の可能性があることを話された。さらに、図書館とは「宝物、宝箱、未知の世界への扉、自分らしくいられる場所、困ったときに立ち寄れる場所、わくわくする素敵で安心する大切な場所」と語る司書がこの7年間で育ってきたこと、そして、メディアコスモスがそこに働く司書や市民、まちと共に進化し続けていることを語られ、締め括られた。

04 参加者の声

- ・図書館の可能性が感じられ、アイデアがどれも素晴らしかった。単体のハコモノではなく、人やいろいろなものがうまく繋がっていく仕掛けに興味深かった。
- ・図書館という切り口が全てのジャンルにつながっていることを気づかせてもらいました。
- ・吉成さん自身にエネルギーがあって、ドキドキワクワクが伝わってきました。自分が楽しむことが一番大事ということをつい忘れがちになりますが、思い返すことができました。